

## 大停滞はなぜ起こったのか：資源配分の非効率か、全要素生産性の低下か？

内閣府 原田泰・中田一良\*

### < 報告要旨 >

経済成長は、労働と資本の投入と技術進歩によって実現される。したがって、成長のためには労働と資本の自由な投入が妨げられるような市場の歪みがないこと、技術進歩が活発であることが必要である。日本の 90 年代以降の経済停滞については、様々な議論がなされているが、林(2003)、Hayashi, Prescott(2002)を除くと、新古典派の成長モデルに基づき、停滞がどのような要因によって引き起こされたかを考察した例は少ない。我々は、新古典派の成長モデルの発想を踏まえ、なんらかの要因によって価格の歪みが生じたときに経済がどのような影響を受けるかを考察する。

第 1 に、新古典派の成長モデルに基づき、経済データを可能な限り再現できるようなパラメータを選び、資本の限界生産性、労働の限界生産性、オイラー方程式、余暇と消費の代替の状況を推計した。現実の収益率は、90 年代以前は、推計された資本の限界生産性を上回っていたが、90 年代に入ってからはその関係が逆転している。これに対して、現実の賃金と推計された労働の限界生産性の乖離の関係は逆であった。

第 2 に、賃金について、この乖離がなかった場合、労働需要がどれだけ発生し、この需要に応じて労働投入を拡大した場合、所得がどれだけ上昇していたかを試算した。試算の結果、賃金の乖離が解消された場合には、労働の投入量は 17%大きくなる。また、生産については、現実値を 10%上回る。

第 3 に、このような乖離と乖離を埋めることについてのオイラー方程式、余暇と資本の代替の意味を考察する。労働供給の増大は、余暇と資本の代替のパラメータから考えて効用を大きく削減するものとは考えにくい。したがって、90 年代の停滞を、賃金の歪みによって生じた労働の資源配分の非効率によるものと解釈することが可能である。

次の問題は、この労働配分の非効率性がなぜ生じたかを特定することである。マネタリーなショックと賃金の硬直性が労働配分の非効率性をもたらしたことが、かなりの確度で指摘できる。

(本稿は内閣府経済社会総合研究所 Discussion Paper Series No.78 「大停滞はなぜ起こ

---

\* 原田泰 (内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官 e-mail:yutaka.harada@mfs.cao.go.jp)  
中田一良 (内閣府政策統括官(経済財政 - 景気判断・政策分析担当)付海外経済担当参事官補佐 e-mail:kazuyoshi.nakata@mfs.cao.go.jp)

本稿を作成するにあたっては、厚生労働省の高田聖治氏に有益な示唆をいただいたことを感謝する。また 2003 年 9 月 29 日の内閣府経済社会総合研究所でのセミナーにおいて香西泰所長、10 月 26 日の金融学会秋季大会でのコメンテーターである河合正弘東大教授はじめ出席の方々より有益なコメントをいただいたことを感謝する。特に、河合教授、高田氏の示唆により本稿を本質的に改善することができた。もちろん、残る誤りはすべて筆者のものである。

ったのか：資源配分の非効率か、全要素生産性の低下か」2003年11月  
[http://www.esri.go.jp/jp/archive/e\\_dis/e\\_dis080/e\\_dis078.html](http://www.esri.go.jp/jp/archive/e_dis/e_dis080/e_dis078.html) により全文ダウンロード  
できる。)